



広島大学国際共創学科の活動から見える大学の国際化と地域

広島大学大学院人間社会科学研究所 教授 Funck Carolin

日本の大学は積極的に国際化を進め、その結果留学生や外国人教員が増加している。大都市圏なら、その人数は目立たないが、広島大学が立地している東広島市では、外国人人口の大きな割合を占めている。広島大学は世界水準の教育研究を行う大学として、文部科学省にスーパー・グローバル大学 (SGU) として指定を受けている。その取り組みの1つとして、2018年に総合科学部でさまざまな国籍や背景の学生が英語を共通語として学ぶ国際共創学科 (Integrated Global Studies (IGS)) を立ち上げた。さまざまな背景の学生とは、海外で育った日本国籍の学生や、両親の国籍が異なる学生、日本の高校を出た外国国籍の学生である。留学生と日本人の二分法には当てはまらない学生が増えており、国籍の多様化、混合化が日本の社会で進んでいることを裏付けている。全国に比べて外国人住民の多い東広島市は、このような多様化が地方都市まで及んでいる先進事例となっている。

IGSの学生はさまざまな地域活動に取り組んでいる(写真1)。また、3年生になると2週間のインターンシップを行うことになっている。インターンシップの受け入れ先はグローバルとローカルな視点をつなげることを目指し、広島県内の多くの自治体、組織や企業の協力



写真1: IGSと総合科学研究科の留学生が福島県へのモニターツアーに参加し、その後、広島大学大学祭(2019年)で福島県の紹介を行った
写真: フンク・カロリン

を得ることができた。コロナの状況下でオンラインに変更された場合もあったが、学生は地域の活動と課題について有意義な経験を積むことができた(写真2)。また、インターンシップで学んだ内容を卒業論文のテーマにつなげる学生も少なくない。

しかし、2020年4月はコロナの感染拡大に伴う入国制限のため、入学予定の外国国籍新入生が国内に入らなかった。また、大学の授業はオンラインに切り替わり、遠隔地出身の学生が東広島市を離れて実家に帰る一方、留学生は大学周辺に残ることを余儀なくされ、帰国もできないままで前期と夏休みを過ごした。秋から段階的に入国が可能になり、対面授業も増え、いよいよ、IGSが目指している国際的な学び合いが再開された。「世界を超える・世界を駆ける」ことをテーマにした学科と、SGU大学を抱える地域は、国籍による線引きを越えた将来に向かっていく。



写真2: 尾道市瀬戸田町平山郁夫美術館でIGSインターンシップを実施したIGS留学生が美術館職員と仕事の打ち合わせを行っている(2020年)
写真提供: 平山郁夫美術館

プロフィール

Dr. Carolin Funck (フンク・カロリン)
フライブルク大学(ドイツ)地学部人文地理学研究所博士課程修了。広島大学大学院人間社会科学研究所教授。2018年に設立された国際共創学科の学科長。専門は観光地理学。『Japanese Tourism』他著者。